

◇牧師室より◇

夫が盲人で針灸医をし、奥さんは弱視で背中はカリエスで大きく曲がっていた。どの病院に行っても子供は生めないと言われたが、命がけで子供を生み育て上げた。礼拝に来るとまず滯沓の涙を流し、説教になると眠り込み、礼拝が終わるとにこやかに帰られた。彼女から勧められて、石牟礼道子氏の「苦海浄土」を読んだ。大きな衝撃を受けた。「石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ」を読んで、今は亡くなった彼女と「苦海浄土」を読んだ時の衝撃を思い出した。

日本の近代化は効率をあげることを至上命題にし、システムとモノ作りに狂奔した。水俣病は、その近代化の中で起こった典型的な悲劇と言えよう。石牟礼氏はいわゆる学歴はない。水俣に留まり続け、痛みで転げまわる水俣病患者たちと命を分かち合いながら生きてきた。その中から生きることと死ぬことの重さと意味を、五感で初々しく受けとめ「魂の言葉」として表した。それは、無痛と快適を求める今日の社会への痛烈な批判であった。

あれだけの苦しみを舐めた水俣病患者は人間であろうとし、なお人間を

求めているという。石牟礼氏は、地獄と化した水俣の「苦海」を「浄土」と言っている。パウロは「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ちあふれました」、また「わたしは弱いときにこそ強いからです」と語っている。この逆説を信じ、体得したところから真に「生きる」ということが始まるだろう。

15人と対談しているが、その人の社会的肩書きや何をしているのかも記していない。肩書きを取ったただの人同士の対談である。「はじめに」も「あとがき」もない。言葉だけを受けとめよという石牟礼氏らしい編集である。

次のように語っている。「遊び文化全盛の中で、人間は希薄になりつつあると思います。深いものとか崇高なことを何にも知らないで育ってきて、遊びだけに自由を感じるというのは気の毒な話です。生のまぶしさを感じないで育ってしまっている、人間の想像力は、なやむ中で深まるのだと思うんですけど、そのように深化させる力が内も外も変わりつつあります」。私に本を勧めてくれた彼女は苦難の中で「生のまぶしさ」を受けとめていたに違いない。

週 報

2001年2月11日 降誕節第7主日
信教の自由を守る日
巻 21 46号

2000年度 教会主題

「主イエスに従う」

聖句 わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

マルコによる福音書 8章34節b-35節

- 目標
1. 生活を整えて礼拝、諸集會を守る。
 2. 十字架の福音に従い、これを宣教する。
 3. 教会創立20周年記念を祝い、将来を語り合う。

日本キリスト教団 横浜港南台教会

横浜市港南区港南台7丁目8-29

郵便番号 234-0054

電 話 045-833-5323

F A X 045-833-6616

振 替 00290-4-13994

牧 師 秋 吉 隆 雄
伝道師 齋 藤 忠 雄